論　文　審　査　の　要　旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	福光由布
学位授与の要件	学位規則第４条第１・2項該当		

論　文　題　目

蘇軾の人生哲学と「書」制作

論文審査担当者

主　　査	教授	青木　孝夫
審査委員	教授	古東　哲明
審査委員	教授	荒見　泰史

〔論文審査の要旨〕

本論文は、「書」を軸に、蘇軾(1036-1101)の人生の哲学と創作美学の関わりを追究するものである。官吏また文人として生きた蘇軾は、その創作活動によって死罪に問われたが、辛くも死を免れた。黄州左遷をもたらした、この筆禍事件を含め、彼は、様々な処遇と表裏一体の関係で、仏教や道家の思想を吸収し、自身の人生観を形成し生きた。その境涯を「書」の制作へ昇華させる一方で、彼は、書の喜びを以て自己の人生を癒しまた涵養し、生の境地を深めた。福光氏の研究課題は、蘇軾に於ける、この人生哲学と書創作の力動的関係の解明である。

論文の構成と内容について述べる。序文と結語の頭尾を別にして、総体、三章十三節である。全体は緊密に構成されているが、大きく見れば、蘇軾と仏教、また道教との思想的関わりを「楽」や「安」の概念を軸に問題化している第一章・第二章の前半部分と、仏教と道教によって形成された人生哲学を踏まえ、蘇軾の創作実践とその境涯の関わりの内実に切り込む第三章の後半部分に分かれる。

本論文の構成は以下の通りである。

第一章は、蘇軾が見いだした「楽（たのしみ）」の概念を、文人の伝統のみならず、仏教の思想圏で解明した。在家を貫いた蘇軾は、一生を通じ、仏教に強い関心を示したが、彼にあって仏教は、その死生観と共に、「楽」をもたらす修行が重要である。福光氏は、この「楽」を媒介に、蘇軾の「書」制作と禅という仏教経験の内的関連について検討する。

第二章では、蘇軾にとっての道家的「養生」法の意義を解明した。道家的修錬は、坐禅に類似する。即ち、禅のもたらす「楽」と「養生」のもたらす「安」は同類である。ともに人生を根底に於いて支える生の産出経験にして喜びを与えるからである。福光氏は、「養生」、とくに「安」の解明を通じて、書の創作と本質的に共通するものとして、自我からの解放と自然との一致という道教的養生の境地を見いだす。

第三章では、蘇軾が自らの「書」の制作過程に、「楽」や「安」の思想や経験をいかに反映させ、具現化していたかを考察する。仏教的修行の経験（第一章）、道家的「養生」法の実践（第二章）を通し、蘇軾は、「生」の根底にある産出的実感として「楽」や「安」を見いだし、これを思想的に定位した。福光氏は、蘇軾が見いだし経験した「楽」と「安」を媒介的契機として、書の創作経験に内在する落ち着きや喜びや集中を、考察する。即ち、蘇軾の「生」の創造と「書」の創作は、その根底に於いて生の産出次元を共有し、翻って、禅や養生や書創作という実践が、生の本質的な喜びの湧出に通じることを論じた。

論文の評価

福光氏は、先行研究の着実な読解と批判に依拠する一方で、蘇軾の活動の内、従来看過されてきた「書」に照明を当てる。特に、蘇軾の境涯の形成に関わった仏教と道教と、書の創作との内的関連を論じた。その結果、氏が主張する仏教と道教の経験が、蘇軾の書の創作活動に深い影響を与え、逆に書の体験が、彼の生の思想的解釈に照明を与えていることが解明されている。

以上のごとく、本論文は、蘇軾の書関連一次テキストの集成と読解、また蘇軾の仏教経験に関する解釈、蘇軾の養生実践の意味に関する知見等、有意義な成果と創見を生み、評価される。

本審査論文は、事前検討の段階で指摘された瑕疵も可能な限り修正され、思想史的記述の厚みも増し、完成度が一層高まっている。論述のスタイルも明快で、学術的に意義深い内容と体裁を備えている。

上記の特色を備えた本文 200 頁を越える大部の考察を纏め上げた福光氏の学力・学殖と力量は、高く評価すべきであり、博士論文の水準に達している。以上の審査結果により、審査委員会全員は、本論文を博士（学術）の学位請求論文として合格と判定した。